

令和2年度 学校評価自己評価表(中間)

学校教育目標	学校教育目標 自ら学び、考え、行動ができる「きさ」の子どもの育成
重点目標	心と志(自立と貢献)を育てる学校

学校関係者評価委員(評価)  
 A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100  
 C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60

評価計画			自己評価			学校関係者評価委員				
経営目標	評価指標	具体的な取組・方策	8月			分析(成果と課題)	改善方策	評価	記述(成果・課題)	
			達成値	達成度	評価					
生きる力の育成	中期	短期								
	学習規律を定着させる。主体的・深い学びの充実を図る。	・学習規律が身に付いた児童を88%(昨年度85%)以上にする。 ・自分の意見を進んで発表できる児童の割合を60%以上にする。	・「相手を見て、反応しながら(うなずき、返事)、相手の意見に対する自分の考えを持って聴き、自分の意見をつなげる」ことを重点に指導し、学習規律の定着及び主体的・深い学びの充実を図る。	68% 78% 平均 73%	77 130 平均 104	A	・学習規律については、授業準備や、授業中の態度等は概ね良好であるが、低学年においては姿勢が悪い児童が多い。また、名前を呼ばれたときに返事ができなかったり、問いかけに対しての反応が薄かったりする実態がある。 ・自分の意見を進んで発表できる児童78.1%自分の意見をノートに記述させることで、自己の考えと向い合せてから、少人数での話し合い活動の充実を図った。少人数で意見を交流し合うことで、自分の考えを広げたり、新たな論点を見出すことができるようになってきている。	・学習規律については、引き続き基本となる姿を示しながら徹底させるよう指導する。特に正しい姿勢を保つことについては健康面と合わせて指導を強化する。 ・返事や反応については、できている児童を肯定的に評価し、望ましい姿を提示する。また、できていない児童には繰り返し指導し徹底させるなど、厳しい指導も必要である。また、道徳科を中心に返事や反応がなぜ必要なのかを考えさせ、自発的にできるような心身を育てていく。	A	・学年が上がるにつれ、学習規律が向上している。効果的な、あるいは粘り強い指導が行われているということの証である。 ・学習態度は落ち着いており、良い姿勢の児童が多かった。先生の話に傾聴できていて、先生との人間関係が築けていると感じた。 ・「姿勢の悪さ」という課題があるということが明確になっている。後半の取組に期待したい。 ・低学年からの地道な指導の繰り返しが必要である。 ・異学年交流や児童会交流によって低学年の状況が改善できるとよい。 ・「自分の意見を進んで発表する」姿を、授業参観で見せていただいた。児童アンケートだけでなく、指導者の実感も伴うものになるとよい。 ・児童の発言の音が全体的に小さく、聴き取りにくかった。大きな声で自信をもって発言できればと思った。
	学力を確実に定着させる。	①全教科の単元テストで80点以上の児童の割合を各学年85%(昨年度81%)以上にする。 ②三次市学力到達度検査(基礎・活用)で、全国平均を上回った学年の割合80%(昨年度75%)以上にする。	・実態に合った指導を工夫し、全ての児童の「わかる・できる」を保障する。 ・ノート指導に取り組み、基礎学力の定着を図る。 ・きさっ子タイムやドリルタイムを複数体制にし、計画的に進める。	81%	95	B	・中学年と高学年では概ね目標を達成したが、低学年の達成値が低かった。低学年には学力に課題が大きい児童が集中しており、全体指導では学力の定着が困難な児童が数名いる。 ・新学習指導要領の趣旨に沿った評価を工夫し、児童が主体的に学習に取り組むことができるように各学年で授業改善に取り組んでいる。	・「わかる・できる」授業づくりの取組を着実に継続していく。さらに、全校で共通課題がある領域については、ドリルタイム等で取り立て指導を行い、改善を図る。個に応じた学力の定着については、児童の実態や指導のそれぞれの場面に依りて、少人数指導、個に応じた選択学習、個別指導やグループ別指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、繰り返し指導等、効果的な方法を柔軟かつ多様に導入するように取組む。また、放課後等の個別指導も継続する。	B	・学力差が大きいという分析があるが、多様な方法により改善を図ろうとしている。指導法も具体性がある。 ・今後、定着度を客観的な数値で把握できるようにしたい。 ・クラスや異学年、または全校で、発表する機会を意図的にたくさん作っていく必要があると思った。 ・改善策の少人数指導、個に応じた選択学習等をどのように行われるのか、先生も児童も負担が大きくなってきているのかなという疑問がわいた。 ・学校から家庭に自主学習を進めていることが評価できる。保護者から学習方法に対して相談があった際、対応サポートができていた。 ・多様な児童についての研究が必要なのではないか。
	自学力を育成する。(小中一貫教育)	・「自分から進んで学習する」児童を全学年70%以上にする。	・考えの根拠を明確にしなが、全ての児童の「わかる・できる」を保障する。 ・家庭学習で予習や復習などの自主学習に取り組ませる。	68%	97	B	・低学年では家庭学習が定着することを中心に取り組んだ結果、概ね定着が見られるようになった。中学年では半数の児童は宿題をこなすのが精一杯で、自主学習には十分に取組めていない実態がある。高学年では毎日自主学習に取り組ませているが、自らの学力定着、向上のために内容を工夫しながら積極的に取り組める児童は概ね半数である。指導を素直に受け入れ内容をレベルアップさせる児童も増えてきている。	・低学年は引き続き家庭学習の定着を中心に取組む、実態に応じて自主学習にも取組ませる。中学年では、がんばり週間を設けるなどして意欲を高めるとともに、できることを習慣化していく。高学年では望ましい内容を提示するとともに、積極的に取り組んでいる児童の内容を紹介するなどして意欲を高める。また、6年生では中学校で必要となる学習の仕方を知らせ、目標をもって取り組めるようにする。	B	・保護者がどれだけが子の家庭学習を見ているのかが気になる。忙しいのは理解しているが、音読や九九等には関わってほしい。保護者の協力を求める。 ・達成がなかなか難しい目標であるが、学年に応じた改善方策が示されている。 ・「コロナに負けるな」地域へのメッセージの取組は、よいアイデアで、児童の自主性を引き出した。 ・生活習慣の見直しがあって自主学習のような気がする。家庭との協力で、生活習慣の向上から自学力の育成を目指すのもいいと思う。 ・家庭では、わが子の課題や長所を十分把握できていない。学校から家庭に少しでも伝えてもらえるようなサポートが欲しい。
	豊かで健やかな心身を育成する	自己有用感の向上と礼節と規範意識の定着(小中一貫教育)。	・自分のよさに自信を持ち、友達の良さを認められる児童を育てる。自己有用感を80%以上(昨年度75%)にする。 ・あいさつのできる児童を85%以上にする。	・お互いを認め合い、つながりを深める集団づくりに努める。 ・研究主題を「自己を見つめ、人としての生き方について考え、よりよく生きようとする力を育む道徳教育の創造～小中をつなぐ主体的で対話的で深い学びの授業づくりと道徳学習プログラム「吉(よ)き舎(やど)りプログラム」を通して～と設定し、成果を上げる。 ・重点目標は定期的に交流し、アンケートや1-checkで分析しPDCAサイクルで取り組む。	81.4%	98%	B	・道徳科との関連を生かし、個性の伸長に対する考えを深めることで、様々な視点から自分を見つめ良さを見出せる児童が76%である。しかし、高学年において、自分の良さを認めることが苦手な児童の割合が多い。 ・吉舎生活3か条を意識して取り組んだ結果、児童アンケートによると「あいさつをしている」と回答した児童は86.7%と昨年度と比較すると高くなっている。	・道徳科で個性の伸長の内容項目を学ばせると共に、日常生活において自他の良さを認めあえる学級での取組を進める。 ・相手に気持ちが伝わるあいさつにしていけるように、あいさつの指標(声の大きさ、表情等)明確にしたり肯定的評価をしたりして意識の向上を図る。	A
体力を向上させる。	・新体力テストの50m走と反復横跳びの項目で、県平均かつ、全国平均を超える学年が6学年中4学年以上(65%以上)にする。	・新体力テストの個人記録を知らせ、県平均等を参考にしながら自己目標を設定させる。 ・児童会で楽しい外遊びを紹介したり、全校行事で取り組んだりして、体力づくりの意識付けをする。	54.1%	83	B	・昨年度に課題のある50m走、反復横跳びの2種目の記録を測定した結果、県平均かつ、全国平均を超える項目は、男子は50m走では6学年中3学年、女子は6学年中3学年、反復横跳びでは6学年中3学年、女子は6学年中4学年(男子50%、女子58%)だった。	・天気の良い日は外で遊ばせ、低学年の間に体を動かす習慣をつける。 ・体育の始めにサーキット運動を取り入れていき、運動能力の向上を図る。 ・冬季には、全校でなわとび週間に取組ませ、なわとび運動で脚力を向上させる。	B	・コロナ禍にあって、体力づくりの機会が減っている現実があるのではないかと感じています。改善策も妥当だと思います。 ・体力づくりに必要な運動だけでなく、睡眠と食事に対しても学校から家庭への働きかけができており評価できる。	
信を頼られる学校づくり	地域に信頼され、開かれた学校づくりを推進する。	・小中連携の充実を図り、月に1回以上、学校だよりやホームページ等で保護者や地域に情報提供を行う。保護者アンケートで肯定的な回答の割合を85%以上(昨年度83%)にする。	・「きさ」小中一貫教育推進協議会の計画のもとに、小中9か年を見通しためざす子ども像に向け、連携教育の実施、充実を図る。 ・学校だより、ホームページで小中連携教育の取組を具体的に分かりやすい内容で保護者、地域に情報提供を行う。児童アンケートや保護者アンケートを実施し、小中連携教育に関わる保護者等の理解を把握し、取組に生かす。	88.7%	104	A	・学校だよりや学校ホームページを通して、小中一貫教育の取組について、保護者や地域に情報発信したことにより、保護者アンケートにおいて、約9割の肯定的評価があった。 ・今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止により、十分な取組ができていないが、小中一貫合同研修会やボランティア活動等の取組を伝えていくことができた。	・保護者アンケートの自由記述には、小中一貫教育のねらいが十分に伝わっていなかったり、学校統廃合や学力格差の問題にもっと目を向けてほしいと感じる意見があった。情報発信をさらに充実されるとともに、学区内の連携をさらに深めていく。	A	・学校だよりやホームページでの発信により、保護者アンケートの数値が既に目標値を上回っている。 ・保護者に対して、しっかりと学校から発信ができており評価できる。また、小学校就学前の保護者の不安に対してでも保護者と連携し、校長が不安のある保護者と面談していただくなど、保護者へのサポートがしっかりとできていた。 ・保護者アンケートにより、課題を洗い取っている。 ・改善策の小中一貫教育の情報発信は、誰が何をどのように発信していけばいいのかが具体的でないため、検討を要する。
働き方改革	教職員の児童に向き合う時間の割合を増やす。	・働き方改革により、児童に向き合う時間の割合が増えた実感を感じる教職員の割合を50%以上(昨年度33%)にする。	・学期ごとのアンケート、メンタルヘルスチェックにより実態を把握し、学校衛生委員会、企画会、総務会の取組を行う。	62%	124	A	・「日課表の見直し」「スクール・サポート・スタッフの配置」「業務のデジタル化」「留守番電話」「リモートによる研修」「研修や会議等の設定時間厳守」「学校行事等の見直し」等により、「児童に向き合う時間」が増えたと感じている教職員が、昨年度の2倍近くに増えた。	・教職員の約3分の1は、「児童に向き合う時間」が「あまり増えていない」または「全く増えていない」と回答しているため、さらなる業務改善を通して働き方改革を推進していく。	A	・「児童に向き合う時間」が、中間評価の時点で、昨年の2倍に増えていることは大きな成果である。 ・これまでの業務の見直しや改善が功を奏している。 ・改善策がもう少し具体的に書いてあるとわかりやすい。 ・保護者として、児童への関わりを大切にしておられることに感謝している。教職員の方々の健康が一番大事だと思う。学校業務で負担軽減が可能なものやなくせるものはなくして、もっと負担を減らしてほしい。 ・先生方の時間を確保することが大事だと思う。ICTを活用してほしい。

(評価) A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100 C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60